

二〇二二年度国文学会彙報

(本学大学院博士課程前期課程)

ホムチワケ御子の物語

——『古事記』における天皇の祭祀——

駒木敏 (本学公会長・本学教授)

二〇二二年度国文学会活動状況

△新人生歓迎会▽ 学生部会主催

二〇二二年四月五日(木) 京田辺校地生協食堂

△国文学会研究発表会・伝統文化継承者成果発表会▽

二〇二二年二月一六日(日) 寒梅館2F二〇三号室

△国文学会総会・研究発表会▽

二〇二二年六月一七日(日) 寒梅館2F二〇三号室

・研究発表

『平家物語』小宰相身投に見る女人入水譚の系譜

・総会

玉越雄介 (本学大学院博士課程前期課程)

・研究発表

古典・漢文教育の実践

第三者に向けた和歌

——自主編成と自主教材作成の視点—— 思想性・形象性・教育性——

——『源氏物語』和歌分類規定からの脱却をめざして——

木村能章 (本学大学院博士課程前期課程)

国木田独歩論——評論と実作をめぐって——

太井裕子 (本学大学院博士課程前期課程)

「由良子」の育て方

「梅にも春」「春雨」「京の四季」メドレー

——谷崎潤一郎「青塚氏の話」における映画言説を中心に——

伊藤早蒔 (本学学部三年次生)

佐藤未央子 (本学大学院博士課程前期課程)

ともに生きる伊勢型紙 大杉里奈 (本学学部三年次生)

谷崎潤一郎『蓼喰ふ蟲』とオリエンタリズム

△講演会▽ 院生部会主催

グレゴリー・ケズナジャット

二〇二二年二月八日(土) 神学館地下一号室

二〇二二年度国文学会彙報

一六九

小説の概念を問いなおす

——中里介山『大菩薩峠』を例に——

二〇二二年度博士論文題目

馬琴読本の生成と展開

三宅 宏幸

紅野謙介（日本大学文理学部教授）

△講演会△ 学生会主催

二〇二二年度修士論文題目

『源氏物語』における儀式と歌への一視点

小説家としての私

二〇二三年一月二日（土） 講武館一〇四教室

——昇華地点としての歌の位相——

木村 能章

遠藤徹（本学言語文化教育研究センター教授）

『源氏物語』における継息子の物語

——伝来の継子譚との比較から——

森あかね

△文学散歩△ 学生会主催

第一回 二〇二二年六月二十四日（日）

『源氏物語』の「同じかざし」

——物語独自の意味を担う引歌——

田中 佑果

東寺・東福寺・三十三間堂・智積院

第二回 二〇二二年一月八日（日）

『延慶本平家物語』における乳母の特徴

——通盛・副将・六代の乳母を中心に——

栃本 綾

天童寺・竹林の道・嵐山

△ゼミ相談会△ 学生会主催

二〇二二年二月一日（木）～二日（金）京田辺キャンパス

『平家物語』における平維盛像

——入水譚として——

徳田 詠美

『宇治拾遺物語』夢說話の考察

——韓国説話と関連して——

趙 智英

第七七号 二〇二二年二月二〇日発行

収載論文七編、資料紹介三編

黄表紙における「昔話もの」創作手法

広津柳浪「変目伝」、『今戸心中』論

早川 広子

第七八号 二〇二三年三月二〇日発行

収載論文十三編

——小説の意図と「悲惨小説」における

「同情」をめぐって——

三浦 大輔

△国文学会会報△ 第四〇号 二〇二三年三月二〇日発行

「故郷」と「新故郷」のまなざし

—— 国木田独歩「帰去来」

太井裕子

「空知川の岸辺」をめぐる——

谷崎潤一郎・小説と映画の交錯

—— 大正期諸作における映画的要素の分析 ——

佐藤未央子

谷崎潤一郎の「日本回帰」作品におけるオリエンタリズム

グレゴリー・ケズナジャット

変貌していく「純文学」

—— 昭和三〇年代を中心に ——

ダニエル・ケリー

村上春樹における「社会性」

—— メタ性と幻想を中心に ——

ピエパルンボ・マリア・テレサ

『平家物語』における漢語副詞

「〜するつもりだ」「〜（よ）うと+思考動詞」

の歴史の変遷

—— 意志表現の定着と相互比較 ——

中村香生里

二〇二二年度卒業論文題目

『万葉集』巻四・四八八番歌の解釈

—— 「秋の風吹く」に注目して ——

『風土記』説話におけるウケヒの展開

大伴坂上郎女の「怨恨歌」について

柿本人麻呂羈旅歌八首の構成意図

—— 畿内・畿外をわける明石海峡 ——

長忌寸意吉麻呂の物名歌二首

(三八二四・三八二七) についての考察

『古事記』上巻のウケヒ神話

『万葉集』巻一七〜二〇における

大伴家持作歌の表記法

—— 音仮名と訓仮名についての調査 ——

万葉集巻五「梅花歌序」について

—— 特に「蘭亭序」との関係を考える ——

古事記神話における死の起源

『伊勢物語』第八十二段の考察

—— 「世の中に」の歌を中心に ——

賢木・須磨巻における光源氏の準拠の変化

原 未菜美

平 沢 元 嗣

堀 井 綾 子

川 端 夕 易

久 保 周 平

前 田 瞳 美

大 苗 愛

高 岡 靖 弘

宇 野 裕 香

松 村 愛 紗

江 南 昌 樹

『源氏物語』における白

——夕顔の巻を中心に——

藤田 あおい

「夕顔」「朝顔姫君」の名付けと人物造形

末摘花の笑いと悲しみ

福永 麻惟  
長谷 香里

浮舟の生

——形代とそこからの脱出——

平井 七生

花散里巻の存在意義

今永 侑里

『源氏物語』における衣装表現

——紫の上と明石の君の人物造形——

楠戸 沙季

『更級日記』における夢

正木 唯菜

『紫式部集』二類本後半部の構成について

森本 泰昭

女三宮の幼さ

——その特質と成長——

野呂 直輝

源氏物語における不義密通

大国 沙織

『枕草子』の夏と冬に見る清少納言の感性

齊藤 未奈絵

『枕草子』の月

——その役割と効果——

清水 祐希

院政期文学としての『讃岐典侍日記』

竹内 淳之介

『玉鬘十帖』における近江の君

上宮 陽子

紫の上が正妻でない意義

山森 梓

「まめ人」として生かされた人物

女三の宮論

矢野 葵

——琴の琴を通して描きたかったもの——

「蓬生」巻における蓬

横川 早紀子

——浅茅と律との比較——

『源氏物語』における夢

藤田 有美子

御伽草子「浦島太郎」の特質

川瀬 唯

——浦島子伝承の変容——

『宇治拾遺物語』における二話連算について

松岡 志保里

『源氏物語』の巻末歌と物語の方法

甚野 裕史

「覚一本」『平家物語』における文覚像

風岡 むつみ

——その呼称から——

城 阪 早紀

『今昔物語集』における髑髏報恩譚

隈元 梨子

『虫めづる姫君』の姫君と作者の意図

関口 景子

『更級日記』上洛の旅の記の地名

——「清見が関」と「逢坂の関」を中心に——

清水 かおり

『落窪物語』の「笑ひ」

杉本 真奈美

『落窪物語』における継母北の方論

竹内 あゆみ

御伽草子「二十四孝」の特質

—— 原典との比較をめぐって ——

碓井 亜友美

『今昔物語集』僧伽羅考

—— 羅刹を中心に ——

吉岡 彩乃

『宇治拾遺物語』「五色の鹿」とその周辺

畑中 規志

『閑吟集』「あらうつくしのぬりつほ笠や」の小歌

樋口 吉男

『建礼門院右京大夫集』の美意識

—— 雪・月・花に注目して ——

伊藤 麻耶

『弁内侍日記』の特質

—— 月と少将内侍を通して ——

岩井 比早子

義経記考

—— 土佐坊襲撃事件 ——

加藤 祥成

『徒然草』における笑いの諸相

奈良絵本『岩竹』における用明天皇

佐藤 春歌

和歌における「あは雪」

—— 詠作と歌学の二視点から ——

武田 めぐみ

『とはすがたり』における悲劇性の考察

和氣 猛史

読み本系『平家物語』における千手観音考

吉田 后希

西鶴武家物における女性

—— 『武道伝来記』から ——

西村 祐美

樽屋おせん歌祭文からみた『好色五人女』巻二

—— おせんと長左衛門の人物造形を中心に ——

山口 葉月

新版歌祭文に見る近松半二

久木 祥平

滑稽本『座敷芸忠屋蔵』及び『腹筋逢夢石』の方法

—— 『仮名手本忠臣蔵』との比較を中心に ——

池田 日菜

『諸国百物語』と他の怪異小説との関係性

井坂 俊樹

遊女評判記の持つ性格から考える

泉 佳代子

『難波鉦』における作者の意図

「助六」の変わり種

小谷 真凜

『東山桜莊子』の評価

—— 馬喰町宿屋の場の必要性をふまえて ——

望月 歩

山東京伝の洒落本における遊興観

—— 『息子部屋』をめぐって ——

中村 理香

井原西鶴『好色五人女』巻五考

—— その創作意図と祝言性をめぐって ——

中上 麻衣

『南総里見八犬伝』悪女玉梓について

大澤 優紀子

太宰治「皮膚と心」における三つのモチーフ

橋本 友里子

衣装の役割を通してみる小説と演劇

榊 山雅美

江戸川乱歩「人でなしの恋」論

廣瀬 和香

動物で描かれた赤本の嫁入物の影響関係

坂本 真裕子

人魚伝における否定と拒絶の方法

伊禮 快

『仮名手本忠臣蔵』改作の方法

住川 愛

——比較文学を中心に——

伊藤 純子

〈逆転〉の構図

鈴木 有紗

寺山修司「毛皮のマリー」考

伊藤 純子

——『東海道四谷怪談』に着目して——

鈴木 有紗

——少女的なるものの裏側——

伊藤 純子

「女神」論

林 悠美

梶井基次郎「ある崖上の感情」に見る

梶 恵美子

——女性誌初出作品の再評価——

林 悠美

山の手と二重人格

梶 恵美子

「痴人の愛」と大正風俗

前垣 円花

谷崎潤一郎「秘密」に描かれる

鎌田 奈々

——ナオミの服飾より——

前垣 円花

欲望の深さと明治期の浅草という背景

鎌田 奈々

中井英夫論

清水 旅人

昭和初期の結婚観からみる太宰治『ろまん燈籠』

木下 世理奈

——『虚無への供物』について——

清水 旅人

——ハッピーエンドの理由——

木下 世理奈

泉鏡花「外科室」にみる技巧と美

鳥生 早紀

井上ひさし『組曲虐殺』における題名の意味

岸本 琴音

——「予」を中心に——

鳥生 早紀

——物語という視点から——

岸本 琴音

坂口安吾「紫大納言」における古典の受容

牛窓 愛子

梶井基次郎「梶井文学における仮面とその作用」

小坂 至乃

型破りな女性像

新居 未希

坂口安吾「桜の森の満開の下」の男

小坂 至乃

——「外科室」における貴船伯爵夫人——

新居 未希

——戦後諸作品のなかの位置——

越場 大貴

「束髪」「男女同権」から見る『浮雲』

綾 仁敏光

——戦後諸作品のなかの位置——

越場 大貴

『僕のなかの壊れていない部分』における〈子捨て〉

綾 仁敏光

向田邦子「男どき女どき」の再評価

前里 有香

——存在の回復と生きる意義——

藤澤 麻紘

——「鮎」を中心に——

前里 有香

「ガラスの靴」における空間

—— 接収家屋という場 ——

松田 絢

箱男の不在

—— カメラを通じて見る「箱男」 ——

松尾 珠美

江戸川乱歩「目羅博士の不思議な犯罪」

—— 丸の内・上野の特性と作品の関係 ——

三村 涼

日記小説と日記体小説

—— 『女生徒』の特徴を中心に ——

三阪 貴弘

「夢十夜」第一夜 白百合と「新しい女」

—— 恋愛への憧れ ——

三好 恵

「銀河鉄道の夜」におけるブルカニロ博士の消失について

—— 音楽と科学を中心に ——

仲里 大輝

星新一のショート・ショート

—— 教科書採録作品を考える ——

野畑 希和子

「既存のモラル」と「真実のモラル」

—— 坂口安吾「外套と青空」 ——

緒方 優子

村上春樹「TVビープル論」

—— 〈TVビープル〉が鳴らす  
メディア依存社会への警鐘 ——

小合 世莉奈

曾野綾子「硝子の悪戯」

—— 顔色に出さない本当のこと ——

大平 泰子

「続夫婦善哉」から見る「夫婦善哉」

月から見る「山月記」

大坂 昂子

江戸川乱歩「目羅博士」の世界における〈鏡〉の効用

三島由紀夫「文化防衛論」

乙野 勇太

—— 自己存在証明としての文化論 ——

「華麗なる一族」の受容と解釈

新里 尚大

—— その時代性と特徴 ——

梅崎春生「蜷」論

白戸 香穂

—— 戦後における社会状況と  
エゴイズムについて ——

社会的背景から見る水月

鷹阪 絢子

川端康成「眠れる美女」における幻想世界

—— その幻想性と幻想の崩壊 ——

田部 佑美

石川淳「八幡縁起」に見る「虚構」と「レアリテ」

—— その幻想性と幻想の崩壊 ——

田中 将大

田中 陽子

加藤千恵論

—— 短歌と短編小説を組み合わせた

津田有紀

作品を書く目的——

三浦哲郎『ポールペン』論

—— 田舎と都会をめぐる出稼ぎ家族と

鶴川悠乃

〈のこされた者〉の存在——

宮沢賢治における修羅の意識

—— 大正七年をめぐる——

植田彩郁

岡本綺堂「修禪寺物語」論

—— 創作の契機とその影響——

植芝千景

谷崎潤一郎「蘆刈」における

過ぎ去った世のまぼろしと遊女

若林琢馬

安部公房「水中都市」における魚への変化

—— 〈相対的原始化〉と酔い——

和久田蒔子

『残光』の空間

国会会議録における外来語「イノベーション」の

増加傾向とその原因の追究

竹内里香

雑誌『文藝春秋』に見る外来語使用状況の推移

依田賢太

村上春樹作品における女性文末表現の変遷

近常太一

木津川「キツガワ」と「コツガワ」

読み方の変遷について

嶽山さお梨

中学校国語科の教科書と高校入試問題の語彙

—— 動詞を中心として——

藤井咲子

柔らかさと硬さを表すオノマトペ

—— 表記と柔らかさ・硬さの関係性——

福田すみれ

原作小説と映像化作品における発話に見る差異

—— 会話文の長さ、フィラー、

橋詰有里

コソア系指示詞に着目して——

時代別に見た「はらはら」の意味分類

早矢仕麻美

『朝日新聞』における句読点の特徴

—— 平均文長、平均読点数、

廣瀬翔平

読点の前の品詞に着目して——

読者層別に見たマンガにおけるオノマトペ

—— 出現頻度、語頭の音素分布を中心に——

稲垣諒

直木賞受賞作の漢字含有率の変遷

菊池優

話し手と聞き手の性別・年齢別に見た

小説における人称代名詞

—— 芥川賞受賞作品を資料として——

小松奈緒子



宮澤賢治の詩における語彙

——自然語彙・身体語彙・色彩語彙を中心に——

小山 紋佳

謡曲における音素分布

——節に着目して——

松本 圭祐

火の共起動詞から結びつく概念

——そこから得た概念メタファーの

三浦 太仁

——日本語教育への応用可能性——

卒業ソングの歌詞と時代別変化

宮崎 千尋

高校球児における人名の変遷

——使用漢字に着目して——

森下 悠

新聞における頻出オノマトペと型の分類

——スポーツ紙と一般紙との比較から——

村山 元一郎

広告キャッチフレーズの表現特性と変遷

——文末形態、フレーズの長さ、

中 千佳

——語種に着目して——

和歌における「にほふ」と「かをる」

——語義特徴とその変遷——

西田 万貴香

漫画の語彙調査

——対象年代・性別の差に見る——

齋藤 美咲

現代若者向けファッション雑誌における語彙

——男女別に見た高頻出語——

菅井 祥子

小学校国語教科書における受け身表現の出現率

——日本語教育における

武田 真生子

受け身表現指導項目との関わりから——

接尾辞「——的」の使用実態

——社説と投書欄、ブログを比較して——

豊嶋 琢真

明治女性書簡文の構成

——樋口一葉『通俗書簡文』を資料として——

和田 由香里

日本語非母語話者のための複合辞研究

——報道番組の連用中止形とテ形に注目して——

山本 真妃

ファッション雑誌における片仮名表記語

——読者層別に見た片仮名表記率——

山本 翔子

洗剤・洗淨剤の商品名における変遷

「上がる・上げる」「高まる・高める」と

山本 優子

共起する使用頻度の高い名詞

金 銀我

——日韓対照研究——